水の川の神話

水の中の神話

三浦哲郎

角川書店

水の中の神話

昭和47年1月20日　初版発行

定価690円

著　者　三浦哲郎

発行者　角川源義

発行所　株式会社　角川書店

東京都千代田区富士見2-13-3　郵便番号102
電話（東京）(265)7111(大代表）振替東京 195208

信教印刷・宮田製本

©Printed in Japan

0093-872111-0946(0)

水の中の神話

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

第一章

十碧湖は、北国の山岳地帯にある海抜四百メートルの火口湖である。周囲四十六キロ、ほぼ四角形の湖であるが、南方から長さ四キロの半島が二本、平行して湖心に突き出ているので、面積に比べて湖岸線はすこぶる長い。湖は、それら二つの半島が作る入江の奥と、東側から湖水が渓流となって溢れ出るところにわずかばかりの浜を残して、あとは深い原始林に覆われた外輪山に取り囲まれている。ただ、入江を抱いている両半島の内側だけは、ところどころに幅ひろく火口壁が露出し、絶壁となって湖水に落ちこんでいる。

十碧湖は、水の美しいことで知られている。透明度の高い湖水は、外輪山の四季を映して刻刻と微妙な変化をみせる。四月末、雪融けのころから、落葉の十一月末までがシーズンで、その間、湖上は絶えず観光客で賑わっているが、とりわけ外輪山の紅葉が湖水を染める秋になると、繰り込んでくる観光客が狭い湖畔の町々にひしめく。町は、西側の入江の奥の焼浜（やけはま）に大きく、湖水が滝をなして溢れ出ている根ノ口（ねのくち）にちいさくひらけている。

梅雨の終りごろの、肌寒い日のことであった。その日、青葉市から四時間半、渓流沿いの道を遡ってくる一番バスは、途中の悪路に手間取って、すこし遅れて根ノ口に着いた。根ノ口は青葉市や五本木市からくる観光バスの終点であり、焼浜行き遊覧船の発着所である。シーズン中なら、軽食堂や土産品の売店が軒を並べている湖畔の広場は、乗り換えの人たちでごったがえして、桟橋附近の湖上には遊覧船から流れる陽気な音楽やモーターボートの音が絶えないのだが、その日は湖畔も湖上も、朝からの霧雨のなかにひっそりと静まり返っていた。

こんなふうに湖が沈黙するのは、深い雪に鎖されている冬を除けば、梅雨の五十日間だけである。

一番バスから降りたのは、雨を衝いて訪れてきた十数人の団体客と、連れのない男が一人だけであった。団体客は、雨を避けて小走りに屋並の方へ駈けていったが、一人旅の男はしんがりになってバスから降りると、その場に立ち竦むようにして湖をみつめ、それから大股でゆっくり湖岸まで歩いていった。齢のころは三十七、八だろうか。ひょろりとした撫で肩にレインコートを羽織るように着て、そう重くもなさそうな黒い旅行鞄を提げた方に軀を幾分傾けている。地面は長雨にぬかるんでいたが、男は湖水に目を奪われて、すこしも足元に気を配らなかったので、泥は容赦なく彼の靴を汚した。

「お客さん。」

うしろから声をかけられて、彼は水際で振り向いた。さっき乗ってきたバスの車掌が、雨に顔をこむけて立っている。

「お客さん、船に乗り換えですか？」

「うん。」

頷くと、油気のない髪が雨の重みで額に垂れた。頬も雨に濡れている。

「船には、まだ二十分も時間がありますよ。梅雨時には一本置きに欠航するんです。あっちでお待ちになりませんか？　無料休憩所もありますから。」

「ありがとう。」

彼は、水溜りを跳び越えながらバスの方へ駈けてゆく車掌を見送ると、肩をゆすり上げて水際を離れた。

無料休憩所の湖に向って開かれた窓から、一緒に着いた団体客たちのうわずった話声がきこえていた。彼はその前を素通りして、隣の遊覧船待合所に入った。入口の軒下に、赤い自転車が置いてあったが、なかに入ってみると、帽子をあみだにかむった郵便配達夫が売店の前に立って、ジュースをラッパ飲みしながら新聞を読んでいた。

男は、ベンチに旅行鞄をおろすと、タオルを出して濡れた顔と頭とを拭いた。それから、売店で牛乳を一本飲んだ。

「船で、焼浜までどのくらいかかる？」
彼は売店の少女にたずねた。
「一時間と二十分です。」
「観湖荘という旅館は、焼浜だったね。」
「観湖荘、ですか？」
さあ、と少女が首をかしげると、郵便配達夫が新聞から顔を上げて彼をみた。
「観湖荘というと、いまの浜屋ホテルのことでしょう？」
と配達夫はいった。
「いや、確か観湖荘だったと思うが。」
「それじゃ、十年も前のことですな。観湖荘は終戦後まもなく、火事で焼けたんでやんすよ。」
「焼けた？」
男は眉を曇らせた。
「調理場から火が出ましてな、丸焼けになりました。だども、なに、いまもおなじ人たちが浜屋ホテルを経営してるんだから、ただ屋号が変ったというだけです。尤も、いまは代替りしてるけんど。」

「……というと?」

「観湖荘時代の旦那は、火事のあと、中風で死にましたからな。いまは息子がやってるんですよ。」

男は、ちょっとの間、目をみはるようにしていたが、

「いや、どうもありがとう。」

といって、ベンチに戻った。そして、煙草に火を点けると、窓越しに、折り返し焼浜行きになる遊覧船がしきりに汽笛を鳴らしながら近づいてくる湖水の方を、目を細めて眺めていた。

船体を白く塗った七十噸あまりの遊覧船は、桟橋に二十人ほどの客をおろし、かわりに一番バスの乗客をそっくり乗せて、また桟橋を離れた。団体の客たちは、初めのうちは派手な日覆いをかけた上甲板で、遠く霧雨のなかに霞んでみえる外輪山を眺めていたが、船が速力を増すと雨が横殴りに吹きつけてくるので、残らず下の船室へ降りてしまった。

上甲板には、一人旅の男だけが残された。彼は、舳先の方に一段高くなっている運転室の蔭で雨と風を避けながら、白い航跡に暗緑色の湖面が裂かれ、左右にうねっては霧雨のむこうに消えてゆくのを眺めていた。

ハッチの降り口のところから、船員の顔が覗いて、彼をみた。

「お客さん、下の船室でガイドの説明がありますよ。」

彼は頷いたが、

「俺は、ここの方がいい。」

船員は、胡散臭そうな目つきで彼をみながら顔を引っこめた。

船が手前の半島に近づくと、右手の霧がうっすらと色づきはじめ、半島の突端をめぐって中湖に入ると、ふいに、思いがけない高みから、樹林を裂いて湖に落ちこんでいる火口壁の断崖がみえはじめた。

彼は、そのとき運転室の蔭から出たが、火口壁の方はほんの一瞥しただけで、反対側の湖心を臨む欄干によりかかった。すると、忽ち風が彼のコートの裾を鳴らした。

『このへんだったな』と彼は呟いた。『急に、行手にでっかい火口壁が現われたからな』

彼はもういちど火口壁の方を振り返った。すると、すぐうしろに、いつのまにきたのか、さっきの船員が立っていた。

「濡れますよ。」

ぶっきら棒にその船員がいった。彼は、黙って微笑した。

「危険ですから、船室に降りてくれませんか。」

「この辺の水深は、大体どのくらいなの？」

彼がそう訊くと、船員は面くらったように目をぱちぱちさせた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「わからんかな?」

「いや、わからないことはないですよ。」と、その童顔の船員が口を尖らせていった。「このあたりは、この湖でも一番深いところです。ここは二重に陥没した火口湖ですからね、湖底は平らじゃなくて、相当複雑なでこぼこになっているようですが、一番深いところは三百七十八メートルです。」

「三百七十八メートルか。深すぎるな。」

彼は独り言のようにそういうと、首を横に振り動かした。

「もう、なにか訊くことはないですか? なかったら船室へ降りてください。」

船員が頬を紅潮させていった。

「透明度は、どのくらい?」

「十八メートルです。」

「ありがとう。」

彼は風にひるがえるコートの裾をおさえて、ハッチを降りた。

焼浜は人口二千、湖畔で最も大きな町である。松並木に縁取られた長さ一キロの砂浜で湖に

接している。大小十数軒の旅館があって、観光客は大抵ここを遊覧の根城にしているが、旅館のなかでは浜屋ホテルが最も大きく、最も湖水に近い。ちょっと昔の城を思わせるような建築で、天守閣のような三階の窓を開けると、左手に町の屋根の重なり合い、目の下に弓なりの浜と桟橋、それから右手に入江の湖水と外輪山の樹林とがみえる。

「変ったな。」

男は、その三階のベランダから町を見下していた。

「前にもいらしたことがあるんですか？」

と女中がお茶を淹れながら訊いた。

「うん。十三年前に一度きた。いや、空から降ってきたんだ。」

女中は冗談にして、おかしなことをいうと笑った。

彼は宿帳に『名倉三郎　三十六歳　無職』と書いた。

「御主人はいるかい？」

さも親しげにそういうので、女中は彼を主人の知合いだと思った。

「相変らず、診療所へいってますけど。」

「診療所？　どこか悪くて？」

「あら、これですよ。」

女中は、袂をおさえて麻雀を打つ手つきをしてみせた。
「麻雀か。それじゃ、待っていても仕方がないな。」
「なにか、急ぐ御用でしょうか。」
「いや、夜でもいいんだ。お目にかかりたい客がきていると、お伝えしてくれないか。」
名倉は、軽い昼食を頼んで、それをベランダの籐椅子の上で済ませた。それから、自分で帳場へ降りていって、湖畔のどこかに住んでいるはずの森下喜作という漁師の家を知りたいといった。番頭は、森下さんなら螢部(ほたるべ)だと答えた。
「螢部というと？」
「この入江の口にある、ちいさな部落ですがね。」
「車で行けるの？」
「さあ、車でも行けないことはないんですが、ここんとこ、ずっと雨でしたからね。相当道が悪いですよ。モーターボートでなら、訳ないんですが。」
名倉はモーターボートを世話して貰って、また湿ったレインコートに腕を通すと浜屋を出た。
ボートは、絶えず陸地の影を見失わないように、彎曲した入江に沿って二十分ほど走りつづけた。やがて速度を落して陸地に寄ると、短いコンクリートの岸壁がみえた。それが螢部の舟着場であった。狭い入江のなかには、小舟が十艘ほど舫ってあった。

名倉は、ボートを待たせて岸壁に上ると、固い砂地を越えて、山裾に十数軒の家が一列に並んでいる部落の方へ、ゆるやかな坂を登っていった。

「森下さんのお宅はどちらでしょうか。」

一番手前の家でたずねると、

「うちも森下ですけんど。ここは十五軒のうち、九軒までが森下姓ですがなあ。森下誰でやんす?」

と、そこの主婦らしい女がいった。

「森下喜作さんですが。」

「そんなら、うちから数えて四軒目の家だす。」

名倉は、おなじような恰好の家を四軒数えてゆくと、その家の湖水を臨む縁側に、六十近い老人があぐらをかいて魚網を繕っていた。名倉は、立ち止って、その老人のうつむいた横顔をみつめた。すると、老人も人の気配を感じたのか、ふいに顔を上げると、老眼鏡らしい眼鏡を額に上げて名倉の方へ目を細めた。名倉は、微笑を浮べて縁先へ歩いていった。

「森下喜作さんですね?」

「はあい、わしは森下喜作だが……。」

「お久しぶりです。名倉です。」

森下老人は、目をしば叩いた。

「お忘れになったでしょう。」名倉は笑いながら、「名倉曹長ですよ。」

「名倉曹長……。」

老人は、それでも思い出せないらしく、湖水を背負って翳っている名倉の顔をよくみようとして、軀を大きく傾けた。

「ほら、戦時中、ここの湖に飛行機で墜落したとき、あなたに助けていただいた……。」

名倉がそういうと、森下老人は急に背を打たれたようにのけぞった。

「おお、あのときの……。これはどうも……いや、無調法しましたなあ。」

彼はうわずった声でそういいながら、まだ信じ兼ねるようにまじまじと名倉の顔を見守っていた。

「あの折には大変お世話になりました。お達者で、なによりです。」

名倉はいった。

「あんたも、ようまあ、御無事で。」

「あなたに助けていただいてから、すっかり死神に見離されてしまいましてね。なんとか、生き延びてきました。」

森下老人は初めて前歯が抜けた口を大きく開けて笑った。彼は、名倉を座敷へ招じ入れよう

としたが、名倉は下にボートを待たせてあるからといって、縁先に腰をおろした。
「で、十碧へは、なんか御用でだすか？」
老人はたずねた。
「いや、べつに急ぎの用ではないんですが……実はあれから、今年は十三年目でしてねえ。」
「十三年……。もう、そんなになりますかなあ。」
老人は、思い出すように湖水の方へ目をやった。
「ええ。ちょうどこの九月で、あのとき死んだ戦友たちの十三回忌ということになるんです。ですから、まあ、湖に花でも撒いてやりたい、出来れば彼等の命日までに遺骨を拾って遺族の人たちに届けたい、そうするのが一人生き残った戦友としての勤めではないか——そんなことを思ったりしましてねえ。どうせ兄の家業を手伝っている身ですから、暇を貰って、こうしてやってきたんですが……。」
名倉は言葉を切って、湖を見やったまま感慨深げに頷いている森下老人の横顔をみつめた。
「まさかとは思いますが、これまでに、もう誰かがあれを引き揚げてしまった、というようなことは、なかったでしょうね。」
「いや、そんなことはなかったです。あれは、あのままでやんすよ、いまも。」
老人は、湖を守ることが自分の責務ででもあるかのように、急きこんでそう断言した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com